〔第 18 章〕別　科

（１）設置の目的・理念

創価大学は、「建学の精神」として３指針を掲げて人材の育成に努めている。別科では、「人間教育」と「人類の平和」を踏まえ、多文化共生、相互理解を通して、人類の平和に貢献する世界市民の育成を目指している。

別科は、日中国交正常化まもない 1975 年、創立者池田大作先生が日中両国の友好を願い、自らが保証人となって日本で初の中国からの国費留学生を受け入れ、日本語教育を行ったところに、その源を発している。

現在は、別科に「日本語特別課程」（交換留学生コース：定員 65 名）と、「日本語研修課程」（予備課程：定員 35 名）の２つのコースを設置しており、2006 年５月現在、「日本語特別課程」に 61 名、「日本語研修課程」に 34 名の留学生を受け入れている。

別科の授業は、少人数のクラス（20 名程度）で運営されており、世界各地からの多様な文化をもった留学生が出会い、共に生活し、互いを認め合う“人間教育”の場ともなっている。寮生活やクラブ、留学生会、大学祭等の活動を通して、また折々の創立者のスピーチや学生への温かな配慮を通して、留学生は多文化共生、相互理解の精神を身につけ、建学の精神を体する世界市民へと育っている。

別科の修了生に対する内外の評価は高い。修了生は、自国と日本との架け橋となり、各界で活躍している。学位を取得し、大学教員や研究者として教育・研究活動に従事している者も多く、中には本学に戻り教員として後輩の育成に努める者もいる。また、途上国でＮＧＯ活動に携わる者や、大使・公使等外交官も輩出している。

近年、私費留学生の多様化が進み、「日本語研修課程」には進学を目的としない学生も増えてきた。また、在外日本人の子弟や日系学生等も増え、継承言語としての日本語教育等、その教育方法も多様化してきている。今後、こうした学生や、進学を目的としない学生のための日本語教育の課程を新設することも視野に入れ検討している。

（２）設置している課程とその特色

別科は、別科学則に則り、本学との交流協定により受け入れる交換留学生のための「日本語特別課程」と、学部・大学院に進学を希望する私費留学生のための予備課程としての「日本語研修課程」の２課程を設置している。

○日本語特別課程

「日本語特別課程」では、交流協定により本学で受け入れた交換留学生に日本語のレベルに応じて、本年は６コースを設置し、日本語教育を中心とした独自のカリキュラムを提供している。また、修得した単位は派遣元大学との単位互換の対象になっている（2006 年５月現在、24 か国・地域、37 大学・機関から 61 名の交換留学生が学んでいる）。

○日本語研修課程

日本語研修課程は、年１回４月に受け入れる１年間の課程である。2006 年５月現在、13 か国・地域 34 名を受け入れ、本年は日本語のレベルに応じ、３コースを設置している。予備教育のため、各コースの日本語到達目標を明示し、その目標達成のために適切な指導

を行っている。本学学部進学の要件である日本留学試験に備え、日本語だけでなく総合科目、数学、英語の授業も開講している。そのほか、日本語能力検定試験の受験対策の授業も後期に実施している。また、通常の試験や実力テスト、毎月の漢字能力認定試験等を通し、学生の到達度を常に検証し、各年度による学生の質の差を少なくするよう努力をしている。

各コースは少人数のため、教員と学生双方の努力で十分な教育効果をあげているが、一方で、なお、大学等への進学時の学生の質が必ずしも一定していないという問題がある。そのため、教材の工夫、シラバスの調整、宿題、個別指導の徹底等、改善を図っている。また、近年の少子化傾向にあって、今後の私費留学生の募集のあり方を検討している。

（3）教育内容

両課程とも少人数のレベル別授業を基本としており、各コースにはコーディネーターを配置している。コーディネーターはコースに応じてシラバスを作成する。また、日本語の授業では、同じ教科書を複数の教師が教えるチーム・ティーチングを行っているので、教師間の要として学習の進度や内容、評価等について、綿密な連携をとり、常に授業の進捗状況を把握し、調整している。

日々の授業では、学生とのコミュニケーションを重視し、双方向の授業を行うとともに、復習試験や小テスト等で学習の状況を確認している。遅れの見られる学生には、個別指導や補講も実施している。教材に関しては、市販の教材では不足している部分は学生のニーズや要望に応えられるよう、別科で独自に開発した教材を使用している。

春・秋学期とも、中間試験、期末試験を実施し、その結果はすぐに学生にフィードバックし、相互に教育効果を確認している。さらに、毎月、別科が独自に作成した漢字能力認定試験を行い、学生の自発的な漢字学習を促している。また、ディベートやスピーチを行って、日本語で意見を発表する機会を設けたり、インタビューやプロジェクト・ワークを通して積極的に日本語を運用する取り組みを行っている。交換留学生は、各学期末に弁論大会や学習成果の発表会を開催している。

視聴覚教育の充実を図るためには、ＣＤ、カセット・テープ、ビデオ・テープ、レーザー・ディスク、ＤＶＤ、ＯＨＰ等の市販および自作の教材を活用し、独自の視聴覚教材の開発に積極的に取り組んでいる。2006 年９月にはマルチメディアに対応する２教室が完成し、ノート・パソコンと学内無線ＬＡＮによるインターネットやパワーポイントなどの活用等、学習環境が整ってきた。

また、座学以外の学習環境整備のため、日本文化体験を授業に取り入れたり、社会見学の機会を増やしたりしている。

「日本語研修課程」は、進学目的のため、詰め込み教育にならざるを得ない面があるが、日本文化体験の授業や、日帰り・一泊の研修旅行を行い、将来への視野を広げるよう配慮している。

さらに、現在実施している研修旅行、社会見学、体験授業の充実、クラブ活動への参加、日本人家庭の訪問の機会の拡大、オプショナル・ツアーの実施など、授業以外での学習活動を広範囲に展開していくことを考えている。また、また、放課後等でのティーチング・アシスタントや日本語ボランティア等、日本人学生との交流の場を提供することも模索し

ている。

次に別科の担当教員数や配置科目について述べる。現在、別科には、日本語担当の専任教員が７名、兼任教員が７名いる。専任教員は全員が、コーディネーターとして授業計画から評価までのすべてを担い、ほぼ毎日兼任教員と顔を合わせて緊密な連携をとって、進度やシラバスの調整を図っているため、学生に対する非常にきめ細やかな指導及び幅広い角度からの日本語教育が可能になっている。また、日本事情等の科目には、学部の教員や学外からの特別講師を依頼している。「日本語研修課程」の日本事情科目は、学部の教員が担当し、進学及び学部入学後に必要な各学部の専門の基礎知識を教授し、大学院進学希望者には研究計画等に対する助言などを行い手厚いサポートをしている。別科では、各コーディネーターがほとんど毎日学生と会っており、常に十分なコミュニケーションをとり、学習面はもとより生活面に至るまで意見や要望を汲み取る努力をしている。授業内容や運営などについて感想、意見、不満などを聞き、常に授業方法等に反映させている。留学生に関しては、学期終了時や帰国に際しアンケートを実施し、感想、意見、要望などを次年度の授業計画に活かしている。

年々、交流協定の拡大により、「日本語特別課程」で学ぶ学生が増加し、別科の特色である少人数クラスの維持が困難になりつつある。また、教員の在外研究や研究休暇のため、学期によってはコーディネーターが複数のクラスを担当することもあり、優秀な教員の補充が望まれる。

（４） 施設・設備／学生生活への配慮

別科は、教育施設として「国際交流センター」内に「授業教室」「マルティメディア教室」「ＡＶ教室」「書庫」「教材開発室」を有している。また、常時学生が使える「パソコンルーム」「ラウンジ」（コピー機、給湯器、電子レンジ、ソファ等設置）「談話室」がある。さらに、留学生担当の職員組織として「国際課」を同センター内に設置し、日常的に学生のさまざまな相談に対応している。

留学生の生活の場となる留学生寮は、男子寮「宝友寮」（収容人数 64 名）、女子寮「秋桜寮」（収容人数 80 名）「サンフラワーホール」（収容人数 40 名）の３寮があり、最大 184 名まで受け入れが可能である。

留学生の在留資格に伴う入国管理局への各種申請については、国際課が「申請取次」を行い、日本国内における留学生活がスムーズに送れるようサポートしている。

（５）学生の受け入れ状況と修了生の進路

本学は 2006 年５月現在、世界 42 カ国・地域の 94 大学と学術交流協定を締結しているが、交換留学生の受講生数は（表１）の通りである。

「日本語特別課程」の学生については、滞在期間終了後、文科省等の給費留学生として再来日する学生、自国の政府機関や日系企業、さらには日本語教師として活躍する者も多い。

（表１）　’81～’06 年７月の大学別交換留学生受講生数

アジア		**北米･中南米**		**ヨーロッパ･ロシア**	
香港中文大学	71	デラウエア大学	13	モスクワ大学	95
香港大学	17	チャールストン大学	1	レニングラード大学	2
マカオ大学	27	テキサス･テック大学	2	ロシア極東大学	23
タマサート大学	21	アリゾナ大学	19	ボローニャ大学	28
チュラロンコン大学	5	モントリオール大学	7	アドバンシア	30
トリブバン大学	13	グァナファト大学	26	ソフィア大学	24
デリー大学	8	デル・バーリエ大学	12	バルセロナ大学	8
フィリピン大学	14	コルドバ大学	1	クラーゲンフルト大学	2
インドネシア大学	9	パラナ連邦大学	8	ルンド大学	2
モンゴル国立大学	5	パレルモ大学	1	ポール・ヴァレリー大学	1
ケラニヤ大学	7	サンチャゴ大学	1		
デ・ラサール大学	5	サンパウロ大学	9	**大洋州**	
マラヤ大学	15	ブエノスアイレス大学	1	ラトローブ大学	1
台湾大学	12	ハバナ大学	14		
中国文化大学	17	アメリカ創価大学	72		
中山大学	6				
慶熙大学	11	**中近東･アフリカ**			
昌原大学	8	アンカラ大学	15		
弘益大学	6	ヘブライ大学	6		
済州大学	4	ｳｨｯﾄｳｫｰﾀｰｽﾗﾝﾄﾞ大学	15		
上海杉達大学	2	ガーナ大学	3		

「日本語研修課程」における近年の受け入れ数および修了後の進路は（表２）の通りである。

（表２）日本語研修課程における年度別進路状況

年度	受入数	進学	就職	帰国	その他（研究生等）
2000 年度	37	23	1	12	1
2001 年度	34	25	0	9	0
2002 年度	36	26	2	6	2
2003 年度	40	30	2	6	2
2004 年度	34	26	1	5	2
2005 年度	35	22	0	12	1

「日本語研修課程」の入学選考は、書類選考のみのため、経験を積んだ教職員が厳格に提出書類を審査検討の後、「入試委員会」の「留学生資格審査部会」にかけ、慎重に審査

を重ね、学生の質を確保するための努力を行っている。

本課程修了時には、在籍者の７割以上が学部・大学院へ進学しており、予備課程の役割を十分に果たしている。本学の建学の精神に共鳴し、進学を目的とせず、本課程に在籍し、修了した学生の中には日本で就職する者もいる。

別科における出席状況の把握は、両課程とも授業時間ごとに担当教員が出欠を確認、記録し、欠席等の場合は、教員や国際課職員が学生と直接連携を取っている。出席状況は、成績評価にも反映され、出席率は 80 パーセントを満たさないと単位の取得はできない。また、出席の記録は、国際課および教員の２カ所で保管している。

別科における留学生の受け入れは 30 年にわたり、各方面に活躍する優秀な人材を数多く輩出してきた。彼らは修了後も互いに連絡を取り合い、各国で同窓会等を実施したり、大学としての同窓会組織である「創友会」の総会の折には母校を再訪して近況報告をし合うなど、修了生同士の活発な交流が続いている。また、帰国後には後輩を本学に紹介するなど、母校にも貢献している。